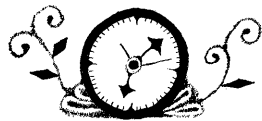


子ども時代と私(3)



戦争と私

南 佑子



はじめに

私の子ども時代は良きにつけ悪しきにつけ戦争との関わりが強く、子ども時代の思い出はほとんどといていい程戦争につながっている。

幼少期の出来事は覚えていないことが多いが、母の昔語りと私の中にぼんやりと残っていたことが結びついて、鮮明な記憶として今も残っていること

もある。

しかし、後で述べる神戸大空襲の日のことは、あの悲惨な光景が忘れようとしても忘れられない強烈な記憶として、私の中にはっきりと残っている。

私は生後二か月で父親の転勤により中国の青島へいき、戦局の悪化と父親の広東への再度の転勤のため父を中国に残し、母と二歳違いの妹との三人で昭

和十七年七月日本に引き揚げてきた。

四歳であった私にはほとんど中国での記憶は残っていないが、当時日常会話に不自由しなかったという中国語は今では全部忘れてしまい、本当に勿体ないことをしたと残念に思っている。

幼稚園入園

昭和十八年四月「神戸愛児園」に二年保育児として入園した。この幼稚園は、幼児教育の先駆者倉橋惣三先生の著書『子供讃歌』の中に「彼の理論を育てた関西の保育者」として登場する望月くに先生が公立の神戸幼稚園を退職後、私財を投じて設立された園であった。望月先生は、母の幼稚園時代の恩師であったので、私を「神戸愛児園」に入園させたということであった。倉橋先生の著書の中に出てくる「自然の中で生活し、自然に親しむ教育」がきつと「神戸愛児園」で日々実践されていたのであろう。

後年、望月先生と同じ道を専攻し、同じ幼稚園に勤務し、現在に至っている私は、このつながりの不思議と、ご縁の深さを思わずにはいられない。

戦時下の幼稚園

戦争は日に日に激化していたが、子ども達の生活はまだまだのんびりとしたものであったような気がする。

式の日には園長先生が羽織に勲章を付けて出席され、園長先生は偉い人なんだなと尊敬の気持ちをもったこと、家から布団を持っていき、昼寝をしたこと等を覚えている。

登園の途中で馬力（馬が曳く荷車）に出会い、友達と乗せてもらって幼稚園に遅刻し、先生や母を心配させたこともあった。

当時の子ども達も歌が大好きで幼稚園や家庭で色々な歌を歌っていた。

「トントントンカラリッと隣り組、格子をあければ
顔なじみ、回してちょうだい回覧板……」

「お山の杉の子」は「大きくなって皆のため」今では
こう歌うが、私達は「大きくなって国のため」と
歌っていた。

「空襲警報聞こえてきたよ、今は僕達小さいから大人
の言うことよく聞いて、慌てないで騒がないで落ち
ち着いて、入っていきましょう防空壕」この歌は余程何
度も歌ったのかメロディーまで覚えていた。

「見よ落下傘空を往く……」
「七つボタンは桜に碇
……」
「見よ東海の空明けて……」

このような戦争にまつわる歌が多い。

もうすでに食糧難が始まっていたであろうが、私
達はお弁当を持って幼稚園に通っていた。「欲しが
りません勝つまでは、頑張りましょう勝つまでは、
いただきます」お弁当時の挨拶はこうだった。

ブランコを力一杯こいだり、燕のでてくる劇をし

たり等、園長先生や先生方の配慮で当時許された範
囲で、精一杯の楽しい園生活を過ごさせてもらって
いたようで有り難く思っている。

幼稚園から帰ってくると、妹や丁度隣に住んでい
た従兄達と鬼ごっこやかくれんぼ等の遊びをした。

二階への階段の一段目に座って、一升ビンに入れ
たお米を、長い棒でトントんとつく精米も遊びの一
つであった。

本を読むことが好きであった私は、母が紙がなく
なるからと買い貯めてくれていた本を片っ端から読
んだ。その中には幼児には難解な物もあったが、意



味も解らず文字をただ追うことで満足していたようであった。中でも親孝行な「白菊」という女の子が父親を尋ね歩く講談社出版の絵本『孝女白菊』が殊の外気に入り、涙を流しながら何度となく読んだことを覚えていた。いまでは死語になってしまった感もする親孝行の大切さを取り上げたこの物語から、時代の背景が窺えて面白い。

物心がつく前から戦争に遭遇していた私にとって絵本の絵や文章がどうしても現実と結びつかないことがあった。「マシユマロのような雲」と書いてあってもマシユマロを見たことも食べたこともなかった私には理解ができなかった。また、絵本に出てくる黄色いバナナと、たまにおやつに食べる真っ黒な干しバナナとが同じものであるという実感が湧かなかった。因みに、本物のバナナを食べたのは戦後三年も経ってからのことであり、その時の感激は今でも覚えている程である。

戦争もだんだん敗色が濃くなってくるに従って、周りの環境が色々変化し始めた。爆風で破れないようにガラスには紙を貼り、夜になると灯りが外に洩れて爆撃の標的にならないように黒いカーテンをひき、電灯は黒い布で覆った。

「建物疎開」とは空襲時の延焼防止のため建物を人力で壊し、建物を間引くことである。

現在のような重機類を使用した解体ではなく、家に綱を巻き着け、何十人もの大人が綱引きのように家を引っ張って壊すのである。子ども達にとっては格好の見せ物であったので、申し訳のないことだが「建物疎開」の行われる日は妹の手を引いてよく見ていった。

連合軍の飛行機が本土に近付くと「警戒警報」や「空襲警報」が発令された。当時の子どもはこの違いを聞き分けることを日頃から訓練されていた。もう忘れてしまったが、戦後しばらくの間は、この音

に似た音を聞くと、気持ちが大不安定になったことを覚えていた。

私が住んでいた家には昔ガレージに使っていた地下室があり、そこを防空壕として使っていた。

「警戒警報」が発令され、いつものように私は家族や従兄達と地下室に飛び込んだ。爆音を響かせ多数の飛行機が上空を飛んでいる様子が地下室の中で感じられた。

その時、防空壕の隙間から、真っ青な空に銀翼をきらめかせ、編隊を組んで飛んでゆく数十機のB 29の姿が見えた。これが大人達という敵の姿なのか、本当に爆弾を落としてきたのだらうか、そんなことを考えながら、その美しさにしばしうっとりとして見られていた。

神戸大空襲

明日に幼稚園の修了式を控えた昭和二十年三月十

七日の寝入りばな、「警戒警報」に続く「空襲警報」にたたき起こされた。

その頃はいつ空襲があるか分からないということ毎晩もんべを着たまま寝ていた。母は私と妹が風邪ひくといけないともんべの上に綿入れの半纏を着せてくれた。防空頭巾を被り、ゴムの長靴を履き、肩から救急袋を下げ、焼夷弾が落ちる中、母に手を引かれて再度山の中腹に急いだ。

道は油脂焼夷弾（エレクトロンと覚えていたが間違っているかもしれない）で火の海であった。油脂焼夷弾というのは焼夷弾が落ちると油が一面に広が



り、そこに引火してあたりが火の海のようになるものなのである。

爆撃の標的を鮮明にするため飛行機から照明弾が落とされ、辺りは昼間のように明るかった。時折飛行機が低空に降りてきて、機銃掃射といって飛行機から機関銃で逃げ惑う人々を撃つのである。

一緒に逃げていた人達が次々に倒れていく。怪我をしたのか血だらけの人を背負っていく人もある。

たまに日の丸をつけた飛行機が飛び上がったもすぐ黒い煙を吐いて落ちていく。その時誰かが「日本軍は何してるんだ」といった。

道の端に小さな溝があり、そこに多くの人がしゃがみ込み、伏せていた。「ここで三人で死のう」母は両脇に私達姉妹を抱え、上に覆い被さりながら悲痛な声でいった。死に対する恐怖感はなかったが、妹の歯が恐ろしさでガチガチ鳴っていたのを覚えていた。焼夷弾が落ちる度に地響きがし、土砂や火の

粉が伏せている私達の上に降ってきた。

逃げ惑う人々の悲鳴、爆弾の炸裂する音、ザーという土砂の降る音、阿鼻叫喚の巷とはあの時のことをいうのではないだろうか。

その時、四歳になっていた妹が母の手を振りほどいて、突然火の海の中に飛び出していった。「良子一人死なすわけにはいかへん」母は悲壮な声を出してそう叫ぶと、私の手を握って走り出した。

全速力で走る妹に追い付き、三人で山腹にある防空壕に入り、空襲が終わるまでそこに隠れていた。

後で聞いた話によると、私達がしゃがみ込んでいた場所の近くに爆弾が落ち、そこにいた人達に多くの死傷者が出たとのことであった。

なぜ妹が急に火の中に飛び出していったのか今では誰にも分からない。何者かの力によって私達は生かされたのだという気がしている。

辺りが白みはじめた頃漸く敵機も去り警報も解除

になったので、私達は我が家に向かって歩き出した。

私達の髪の毛はどこどころ焦げ、防空頭巾や半纏にも無数の焼け焦げがついていたという。

家の近くまで辿り着いた時、隣近所の家や我が家が燃えている最中であった。真つ赤な炎を吹き上げて燃えている家々を、消火も出来ないので近所の人達とぼんやりと見ているしかなかった。

「お雛さんが焼けてる」飾っていたお雛さまを思い出し、恐怖感から解放された安堵感も手伝って、私と妹は大声をあげて泣いた。家が焼け落ちるまで泣き続けていた。

通っていた「神戸愛児園」もこの日の空襲で焼けてしまい、廃園になってしまった。

両親共神戸生まれの神戸育ちで、田舎をもたなかった私達は、焼け残った家屋に移り住んだが、それも六月五日の空襲で焼けてしまった。仕方なく縁

故を頼って岐阜県の飛騨古川に疎開し、一年生になつていた私は、村の複複式（三学年一緒）の小学校の低学年クラスに転校した。

転校した当初は「疎開の子、疎開の子」とよくいじめられたが、その生活に慣れるにつれて友達も出来た。自然の中で楽しい遊びを次々教えてもらい一日中山野を駆け巡って過ごした。泳ぎを覚えたのもこの頃であった。

八月のあの日、いつものように山遊びから家に帰ってきた私は、ラジオを真ん中にして泣いている大人達を見た。尋ねてみると戦争に敗けたということであった。何故そんなに悲しいのかよく分からなかったが、その夜から電灯に黒い覆いをかけなくてはなくなったことを知り、私にはそのことがたまらなく嬉しかった。

（神戸市立神戸幼稚園）